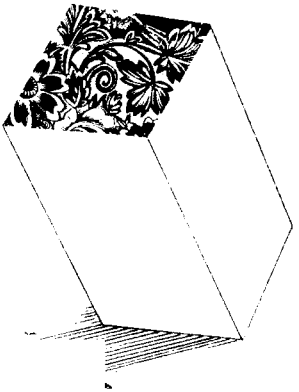
芹澤光治良作品集

第十卷

父と子
友情

芹澤光治良



新潮社版

人間の運命　1
父と子・友情　〈芹澤光治良作品集10〉

昭和49年11月10日　印刷
昭和49年11月15日　発行

定価800円

著者　芹澤光治良
発行者　佐藤亮一

発行所　株式会社 新潮社
東京都新宿区矢来町71
電話　業務部 (03) 266-5111
編集部 (03) 266-5411
郵便番号 162　振替東京 808

印刷所　大日本印刷株式会社
製本所　新宿加藤製本株式会社

© Kojiro Serizawa 1974 Printed in Japan
乱丁・落丁本は，御面倒ですが小社通信係宛御送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

目次

父と子　173
友情　5

装画 司 修

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

芹澤光治良作品集　第10巻

父と子

〈人間の運命〉第一巻

第一章

その昔、この地方に定住していたアイヌ族が、西方から移動して来た和人に追われて、東北に移ってからも、この地方を思慕して、この世の天国だとうたったために、ここを駿河の国――アイヌ語で天国、と呼ぶのだと、歴史の先生が話したことがある。

一年の三学期であったが、その時先生はつけ加えた。

「この地方を天国と思ったのは、アイヌだけではない。君達の祖先が何処から来て、ここに土着したか、次の時間までに、家できいてみなさい。案外、武田信玄や北条早雲などの家臣が多いかも知れないよ。甲斐や相模の山岳地帯に割拠した武士が、初めてこの地方に侵入した時、天国にはいったように戸惑いしたものだ。風光は明媚、気候は温暖、天産は豊富、住人は温和だからね。武将の家臣が武器をすてて、この土地に土着したのは、天国だと感じたからこそだよ。現に、先生も、同じ理由でここに永住するつもりだ。しかし、この天国のような風土は、君達のような少年や若者には、よくない。真摯な精神をやわらげ、挫くからな。刻苦勉励する精神を失わせる。よほどしっかりしないとかんぞ。そのために、この地方からは傑出した人物が出ていないからな――」

五十名の同級生のうち、武将武田氏や北条氏の家臣を祖先にもつ者が六名もあることが、判明したが、しかし、森次郎は歴史の先生の言葉に承服できなかった。

天国というのは、そこに住む者が皆しあわせでなければならないが、彼の部落には、飢えに瀕した不幸な人ばかりである。風景がいいとか、気候が温暖だとか言っても、相対的なことで、他の地方を知らない者には、意味のないことだ。ここのように温和な土地に育つと、惰弱になりやすいために、この地方出身者に、著名な軍人も政治家もないことは、中学校に入学してから、機会ある度に、校長や体操の先生から言われて、聞き飽きている。歴史の先生まで、修身のような訓示をするのはかなわない。

二年生になったばかりに、赴任して来た若い図画の先生も、最初の図画の時間に、この地方の風景の美しいことを讃美した。級長である次郎は、たまりかねて――先生、風景の美しいということがわからないです、と言って、先生を当惑させた。上野の美校を出たばかりの前川先生は、旅をしたことがあるか、東は何処まで旅行したか、西はと、憤った表情で問いかけた。

「修学旅行で、東は御殿場まで、西は静岡までしか、行っ

たことがありません」

「そうか」と、言ったまま、すぐ授業にかかって、次郎の質問を外らした。しかし、次の図画の時間に、先生は野外写生だと称して、中学校の裏から、一キロばかり離れた香貫山へつれ出した。落葉を掻く部落の人々が踏みならしたけわしい小径を、一列になってやっと二百メートルも登ると、尾根の一角らしい二、三十坪の平地に出た。此処へ登ったことのある生徒が一人もないことを知って、先生は呆れた顔で、ここから君達の故郷をよく眺めろと言って、休憩させた。

「自分は南国土佐の産で、四国も瀬戸内海も北九州も中国地方も知っている。美校時代に、近畿地方や関東地方も写生旅行をして知っている。しかし、こんなに美しい風景の土地は、あんまりないよ。よく一望のうちに故郷をおさめて、景色が美しいということを知るんだな。そして好きなように何処でも写生してみろ」

わが住む土地を、次郎は初めて他処の土地のように眺める思いで、目を見張った。眼下にひろがったパノラマの中央に、足下の山麓から駿河湾へ、白く光って大きくS字形を描いているのが、あの狩野川であろうか。こんなにも川幅が広く、まんまんと水を張っているとは知らなかった。その右岸にかたまって見える静かな家々が、沼津の町であろうか。二万人足らずの人口が、このなかにかくれているのであろうか。町の背後に、菜の花であろう、黄色な平野がかすんで拡がり、紺青の海との境に、黒いふちどりがつづいているが、河口から千本松原をへて三保の松原につづく松林が、こんなに一刷けの黒色であろうか。町の北側に、屏風のように愛鷹山が控えているが、その頂が切りとられたようにけずられて、その上に富士山がのり、愛鷹山の斜面は遠く東に箱根山につらなっている。次郎は息をのんで眺めていた。

「森、描いていないな」と、先生が背後で微笑んだ。

「いいんだ。こんな壮大な風景はミケランジェロでも絵にならなかったろうからな。あの天才にもこんな風景画がないんだ。そら、白い汽船が狩野川を下ってる。伊豆通いの船だろう。河口の左の岡、あれが不動岩か。不動岩の手前にかたまっているのが、森の部落だな。我入道といったね。そのそばの可愛い山が牛臥山だな。寝た牛の置物のようだが、牛臥山も不動岩も、島だったのが、狩野川の川砂で埋まって陸つづきになったんだろうね。牛臥山の横が桃郷浜だな。御用邸が見える——が、あの先の海岸は、伊豆の山がせまって、岬が重なりあって内海だね。不動岩のはるか彼方の対岸が大瀬崎だろう。この内海には、すばらしい画題になる場所が無数にある。自分は一生ここにいて、描い

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

ても描きつくせないと思っているんだよ……日曜日の度に歩いているが……森、ここから眺めていても、故郷の風景が美しいことが、わからないか」

「わかりました」

「御用邸や離宮は、日本で風景のいい処を選んで造営されるが、使用するのは、気候のいい健康地だけだ。箱根には修学旅行で行ったか。そうか、まだか。箱根の湖にのぞんで景勝な地に、すばらしい離宮があるが、一度も使用していないそうだ。霧があって気候がよくないからだと言われるが、沼津の御用邸は使用されない年はなかったそうじゃないか。気候がよくて、空気にオゾンが豊富で、そのおかげで、弱かった皇太子殿下が此処で健康になられたという話だよ。森、君の部落の我入道――面白い名前だが、日蓮上人が竜の口の難を逃れて後、漁船にかくれて鎌倉を逃げたのだが、潮か風の具合で、船が君の部落に流れついて――この土地こそ我が入る道であると、宣言しながら上陸して、身延山へ行ったことから、我入道と呼ばれるようになったと聞いたが、ほんとうか」

「知りません」

「君はなんにも知らんのだね。学問や勉強も、自分の足もとからやるんだ。故郷のことを知らんと、故郷を出てから後悔するぞ――」

こんな先生の言葉も、次郎は日頃忘れているのだが、学校に皇太子殿下が行啓になるというので、二日も授業ぬきに掃除ばかりさせられて、最後に、教室前の廊下のインキのしみが、雑巾で拭っても拭っても消えなくて、うんざりしている時、ふと思い出した。

皇太子殿下の行啓は、前日の朝礼の時、校長から発表になった。富士山麓で行われた大演習を観戦して、御用邸でご休養中の殿下が、「特に中等教育にみこころをよせられて、平常のままの授業を参観すると、仰せいだされた」ということであった。

殿下がわが中学校においでになるのか――と、生徒はぽかんと聞いていたが、その発表と同時に、校長は感激に声をふるわせて、いかめしい訓示をした。鴻大無辺な皇恩とか、皇室の尊厳とか、千載一遇の光栄とか、恐懼にたえないとか、耳なれないおごそかな言葉を、歯ブラシという渾名の原因である短い白髭の下から、無数に飛ばして、若い胸をあつくさせた。そして、直に全校の掃除にかかったが、その掃除が、全校舎を水洗いし、校庭の雑草を、一草たりとも見逃さずにぬきとるという徹底ぶりで、しかも、二日かかるという大がかりであるから、生徒達も、殿下の行啓がどんな意義があるかわからないながらも、母校にとって

「千載一遇の光栄」であるにちがいないと、緊張した。尤も、前日早朝、県庁の学務部長がわざわざ中学校に出向いて、殿下の中学校行啓は、全く異例なことで、これは沼津中学校にとって、「千載一遇の光栄」であるばかりでなく、静岡県の教育界全体の名誉であると、感激して語り、奉迎について、校長はじめ全職員に細心な注意を与えたが、その特別な処置のために、校長や先生が皆興奮していたからでもある。

次郎は特待生で級長であるから、こんな場合、率先して、掃除もし、クラスを監督しなければならないが、さて、責任ある掃除が全部おわってほっとした時、教室前の廊下に、小さいインキのしみを発見した。そのしみは、誰が拭いても、薄くならないので、級長自身四つん這いになって、拭きにかかったが、雑巾に力をいれながら、皇太子殿下の行啓を仰ぐという光栄も、この地方が天国であればこそかと、ふと歴史の先生の言葉を思い出したわけだ。それをしおに、インキのしみを消すという愚かな努力を忘れるために、わざと頭のなかで、一つのことを考えようとした——

……桃郷の海浜に御用邸が造営されたのは、いつであろうか。小学校一年生の時から、毎年幾度も、皇太子殿下や皇后陛下や皇孫殿下の奉送迎のために、授業を休んで道路に行列した。恐らくそのずっと以前に、御用邸はできたろうが、その間、どなたも中学校に行啓しなかったのであろうか。小学校には、皇孫殿下が散歩の途中ひょっくり立ち寄られたことが幾度もある。いつも金ボタンの洋服に帽子をかぶって、兄弟三人つれだっていた。おつきの大人も一人か二人で、警備の巡査などもなかった。運動場で体操している時など、三人とも珍しそうに見物して、立ち去らなかった。小学生はみな着物で、袴をつけている者はなく、はだしで、裾をはしょって体操したが、パンツを着用しない時代で、オチンチンがのぞくからか、殿下が立ち寄られると、先生の命令で一斉に着物の裾をおろすが、足に裾がからみついて困った。とくに、先生は殿下がおみえになると、殿下のお好みか、きまって競走をさせてご覧に供した。走り出すと着物の裾に足をとられて、倒れる者が必ず数人出たが、必死に起き上って走り出す恰好は、見るからに滑稽であったろう。三人の殿下ものんびりしていられたが、学校でも特別に掃除をするのでもなく、のどかであった。ただ、登校の途中や下校の途中で、殿下に行きあって質問をうけた時には、はっきり返事するようにと、注意があるぐらいで、その返答のために、言葉をよくするようにと、例えば、うんの代りに、はいと言えと、幾度もはいの練習をさせられたが、三人とも殿下は自分たちと同じような少年で、話のできる相手という建前であった。皇太子殿下が

ありのままの中学校を見たいというお考えで、来られるならば、二日がかりの大掃除などしないで、小学校の場合のように、のどかにお迎えできないものだろうか——

「おい、西組も掃除をやめないか」

そう頭上から浴びせかけられた。両膝をついたまま、汗ばんだ顔をあげると、東組の級長の石田孝一が立っていた。

「いくら掃除したって、二年は皇太子さんが参観しないんだよ。廊下をお通りになるだけじゃないか。そんなに磨きたてても無駄だ——」

「廊下をお通りになるから、磨かなければいけないんだ。このインキのしみを見ろ——」

「いいかげんにしろよ。西組がやめないと、東組も帰れないんだ。廊下はすっかり光って、皇太子さんがすべるぞ——」

石田は廊下を磨いている他の二人の西組の生徒に、そう呼びかけた。その二人もバケツや雑巾を持って、次郎のところに集まった。もうやめようという表情だ。東組の教室からも、数人かけつけた。全部上衣をつけて、帰り支度をすませ、石田に、早く職員室へ行って来いと促した。

「西組がおわらないと、禿万は、東組がなまけているといって、窓硝子の拭きなおしを命ずるからな」

「禿万の照りかえしが窓にあたると、拭いた硝子まで埃っぽく見えるからね。おい、森、西組もおわったんじゃないのか」

東組の生徒が喰ってかかった。次郎もやおら立ち上り、廊下を東西に透かして見た。細長い平家の校舎で、一年から三年までの六教室がつづいて、突当りが図画教室である。教室の前には、一間幅の廊下と同じ幅の三和土がのびているが、廊下は磨きに磨いて光っている。この廊下を、皇太子殿下は一年西組の教室から出て、歩いてことを通り、三年東組の教室にはいられる——そう思って眺めると、今まで拭いていたインキのしみが、まだ気になった。

「川田たち、帰っていいぞ。あとは引受けた。僕はこのしみを消して帰るからな」

次郎は級長らしい自信をもって、西組の仲間にそう言い、東組の者を無視して、再び坐りこむようにして、拭きにかかった。

「森、お前はこんな時に、禿万や河童のご機嫌取りをする気か」

東組の者が皮肉に浴びせるのに、次郎は吐き出すように言った。

「僕は皇太子殿下のために、このしみを消そうと思うんだ」

「そんなことより、皇太子殿下が折角行啓になっても、僕たち二年生だけを参観しないって、どういうわけかね。一年西組、三年東組、四年東組、五年西組の授業を参観して、二年をとばすなんて、僕は理解に苦しむな。みんなどう思う？」

東組の神部がみんなに問いかけた。

「そうだ、二年をとばさないで、一年がやめて、二年を参観してもらえばいいんだよ、ね」

「一年なんか、入学して一カ月やそこらで、校風にも染まっていないじゃないか」

「二年の学力が低いからと言うなら、二年を侮辱していると思うよ」

「だから、二年も参観してもらいたいと、申し出ればよかったんだ」

神部の発言が、朝から二年生の間にくすぶっていた不満に火をつけた。その日の朝礼に、殿下の参観を仰ぐクラスが発表になった時、何故二年が参観から除外されたか、二年生はみな疑問を抱いたが、担任の先生に質問もできなかった。そう口に出す事さえ、畏れ多く、不敬になりそうに思われた。しかし、教室の掃除に残った者は、神部の発言で、胸のなかの疑問や不満を爆発させた。

「おい、みんな、二年にも参観してもらうように、今から校長へ申し込もうじゃないか」

「歯ブラシには、禿万と河童から、言ってもらった方がいいぞ」

「石田、お前は級長だから、先頭になって、そう言えよ」

石田は仲間の不満を、微笑しながら聞いていたが、冷笑するように遮った。

「皇太子さんが来るからって、そんなに大騒ぎしなくてもいいよ。参観してもらわなくたって——」

「石田、皇太子さんなんて、親しそうに言うな。皇太子殿下と言え」と、神部が喰ってかかった。

「僕のうちには幾度も来たからさ」

「なんだって、皇太子殿下がお前の家へ行ったって？　そんなばかなことが——」

神部は笑ったが、他の生徒も石田のほらだと、なじった。

「お前の家へ殿下が行ったなら、新聞に出たはずだぞ」

「微行だから、新聞に出なかったまでよ」

「お前がそんなに殿下に親しいなら、禿万にでも歯ブラシにでも、そう言って、二年を参観してもらえよ。なあみんな、石田と職員室へ行こうや」

「去年皇孫殿下が図画教室へお見えになった時には、誰も騒がなかったし、新聞にも出なかったじゃないか」

「だから、今度は公式の行啓で無上の光栄だって、歯ブラ

シも言ってたじゃないか。それなのに、二年だけ参観から除外されるなんて、なあ――おい、石田」

そう騒ぎたてて、十名ばかりの二年生が、石田をかこみ、押すようにして職員室の方へどやどや去った。あとに独り次郎は廊下にうずくまって、インキのしみを拭いていた。

皇太子殿下が参観するのは、県の学務部長の通達で、英語、国語、歴史、物理の四クラスということであったが、さて、どの教師の、どのクラスの授業の参観を仰ぐべきか、校長は一存で決したかったが、それもできない面倒があった。前夜の職員会議は、そのためにおそくまでかかったが、結局、殿下のご希望の科目を担当する主任教師が、参観授業をするという、校長の発案に従って、一年西組が国語、三年東組が英語、四年東組が物理、五年西組が西洋史と、自然に決定した。その際、二年東組の担任教師も西組の担任教師も、一年生の代りに二年生の授業の参観を仰ぐべきだと、主張した。禿万という渾名の小川万蔵先生は、禿頭に汗をうかべて熱心に論じ、興奮するとオールバックの髪を乱すために、河童という渾名を奉られた砂田先生も、髪を乱し顔を真赤にして、二年生のために弁じたが、校長が渾名の歯ブラシのように短くたてた口髭を、神経質に引張りながら、

「どのクラス、どの先生の授業が参観の栄に浴するかは、問題ではありません。皇太子殿下が本校に行啓あそばされること自体が、本校の全生徒、全職員の光栄でありますからな」と、近眼鏡の奥から、じろり二人の方を見つめたので、小川先生も砂田先生も不本意ながら承認した。

そんな顚末を、生徒は知るはずがないから、二年生が疑問をいだいたのだ。

小川先生は掃除の監督に行こうとして、職員室を出たとたん、廊下の向うから、二年生が押しかけて来るのを見て、立ち竦んだ。職員室の隣が校長室、その隣が応接間で、その二部屋を殿下の御休憩室にととのえて、校長が神妙な顔で控えているはずだ。慌てて二年生の方へ駈けより、機先を制した。

「掃除がすんだか。石田、お前が責任をもって、みんなを帰したらいいよ」

瞬間、二年生は気勢をそがれて、顔を見あわせたが、神部が落着いた声で言い放った。

「先生、なぜ二年だけ、東組も西組も殿下が授業を参観しないのですか。二年生が特別に評判がわるいからですか」

他の生徒も真剣な面持で、先生に無言で向った。

「心配せんでいい。籤引のようなものできまった。先生も砂田先生も籤運が悪くてな――」

「籤できめたんですか、こんな重大事を」と、吐息する生徒もあった。
「しかし、悲観せんでいい。学校できめても、殿下が参観なさる時に、二年の教室におはいりになることもあり得るぞ。最後は殿下のご意思できまるんだからな」
先生が嘘を言う筈がないから、気負った生徒もしずまった。実際、参観にしても、殿下のご意思できまるべきだと、生徒は自然に考えたからだ。
「先生、学校が勝手に参観のクラスをきめて、皇太子殿下のご意思や行動を束縛するのは、不敬なことですね」
「でも、あらゆることを考えて、それに対して予め用意するのが、奉迎する学校の義務だからな」
「すると、あした殿下のお成りの頃の授業は、先生の国語ですが、準備しなかったけれど、いいですか。突然参観になっても——」
「二年東組は国語は大丈夫だからな。西組は砂田先生の数学だが、安心だろう。しかし、みんなもよく予習しておくんだぞ」
先生を信ずるから、二年生は安心して、解散した。石田は一応教室に帰ったが、西組の教室前の廊下に、西組の級長の次郎が四つん這いになっているのを見て、顔をしかめた。小柄で、漁師か百姓の子のように無骨で、上衣を脱いでいるが、シャツはよごれて色がかわっている。無口で、石田も殆ど口をきいたことがないが、ただ成績が一番だということで、彼を級長に選んだのは、西組の不見識を笑いたい。
「そんなに磨いて、インキは消えても、木が白くなって却っておかしいよ」
そう声をかけると、次郎はゆっくり立ち上って、廊下を透かして見た。
「わかったろう。雑巾はやめろよ。おそいから、僕は帰るよ」
そう冷たく言いのこして帰ろうとすると、次郎が真剣な表情で呼びとめた。
「ね、君の家へ皇太子殿下が行ったって、ほんとうか」
「うん、何回もね、皇太子さんだけでなくて、皇后様も、皇孫殿下も……それがどうしたの」
「僕ねえ、さっきから、ずっと考えてみたけれど、いつか皇孫殿下が図画教室に来られた時とちがって、今度は、なぜ大騒ぎするのだろう」
「公式な行啓だからって、校長は言ったろう?」
「その公式な行啓ってことが、わからないんだ」
「校長にでも質問するんだね」
「君の家へおいでになる時も、大騒ぎするの」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c